INFORMATION

新しい年が始まりました。今年も、盛りだくさんのイベントを紹介していきます。まずは、第15回の寺子屋トーク。ぜひ多くの方のご参加をお待ちしています。

持ち込み企画も大歓迎。会員のみなさんの楽しい企画をお待ちしています。

第15回寺子屋トークは「日本語のレッスン」

今年初めての寺子屋トークは、「日本語のレッスン」と題し、演出家の竹内敏晴さんをお迎えします。

相手の魂を揺さぶるというようなことばの力が失われかけている、と竹内さんはいいます。同時に、自分のことばで語ること、つまり自分の意志をことばで表現することの大切さを訴えられています。

また、竹内さんは演劇創造とともに障害者療育にも長年関わってこられ、独自の理論によるプログラムで、ことばの持つ根源的な力を回復するレッスンを続けていらっしゃいます。

自分本来の声を取り戻し、からだもこころも開かれていくことは、不登校やいじめ、ひきこもりなど、多くの教育問題にも関係しているといいます。自分と向き合う、他人と向き合うことの意味を考えさせられる寺子屋トークです。

○日　時　2月11日（祝）
　　午後1時～3時
○会　場　應典院本堂ホール
○参加費　500円（一般1000円）
○申込み　前日までに事務局へお電話ください。

◆　◆

竹内さんの「からだとことばのレッスン」を日本吃音臨床研究会の主催で、應典院で開講します。3月から、毎月第2土日の2日間、定期的に開催されます。

こちらもぜひご参加ください。

《第1回目》
○日　時　3月13日（土）
　　午後2時～8時30分
　　14日（日）
　　午前10時～午後4時
○申込み　日本吃音臨床研究会事務局
　　TEL.0720-20-8179
　　FAX.0720-20-8244
※4月からも第2土日の2日間、定期的にレッスンが行われます。
※1日のみの参加も可能です。
※料金等、詳細はお問い合わせください。

第16回寺子屋トークは橋口譲二氏に決定

寺町倶楽部主催の初イベントの写真展でお馴染みの橋口譲二さんが、第16回寺子屋トークにご出講いただくことが決定しました。

橋口さんは、ご存じの通り、「職」、「夢」など、日本人の様々に姿をとらえた写真集を発表され、その写真は自分が自分らしく生きていくことの大切を教えてくれます。

スライドを上映しながらのトークショーで、橋口さんのメッセージは、いろいろな気づきや学びを与えてくださるのではないでしょうか。

4月中の開講の予定で、詳細については次号サリュにてお知らせします。

どうぞご期待ください。

■年忘れ交流会を開催

12月26日（土）、自分感謝祭夜の部終了後、年忘れ交流会を開催しました。参加45名。

一年の自分を振り返り、新しい年への誓いをたてた厳かな自分感謝祭。新たな気持ちを胸にしての年忘れ交流会は、初めて参加の方もたくさんいらっしゃいましたが、和やかな雰囲気で、新たな誓いを話し合うみなさんの姿が印象的でした。

■新年初は「友だちの輪」新年交流会

年明け初めての催しは、1月8日の友だちの輪新年交流会。新たな年を賑やかな迎えようと、有志による漫才や日舞、創作曲ライブ、ジャズライブなど、2階気づきの広場特設ステージは、盛りだくさんの内容でした。参加62名。

この交流会は、会員の有志のみなさんによる手作り交流会。1階では、似顔絵やメークアップ講習、バルーンアートなどが催されました。料理も、在花エンタープライズの田中賀鶴代さんのご協力で、プロの手による料理が所狭しと並べられました。

賑やかな会場全体で、新年に新たな交流の輪が広がりました。

■写真屋なぎちゃんの写真考座

前々号からお知らせしているこの写真考座も、定着してきました。毎回少人数ですが、写真談義に花が咲いています。ぜひ、ご興味のある方はご参加ください。

次回は…
2月16日（火）　午後7時～

サリュ VOL.12
應典院寺町倶楽部のニューズレター
発　行　日　1998年2月2日
　　（偶数月発行）
編　集　人　池野　亮
発　行　所　應典院寺町倶楽部
〒543-0076大阪市天王寺区下寺町1-1-27
　　TEL.06-6771-7641
　　FAX.06-6770-3147

應典院寺町倶楽部のニューズレター

Salut

［サリュ］
フランス語で救いの意

1999 FEBRUARY
vol.12



人と出会う……。今までも多くの出会いがあったし、そしてこれからもあるでしょう。けれど、誰もが過去の出会いの多くを、あるいはそのほとんどを忘れてしまっているのではないでしょうか。

人との出会いは、気づきにつながります。しかし、人とただ単にすれちがい、ことばをかわすだけで、それを出会いと思ってしまっているのではないですか。相手と向き合い自分と向き合う、それが本当の出会いではないでしょうか。

新しい年、多くの人がほんとうの出会いを感じる機会――それが今年の寺町倶楽部の目標です。

新春トーク'99

應典院と「公共性」をめぐって……

ひととふれあう、わたしと向き合う。新たな「場」から始まる、もうひとつの公共文化を語り合う。

スタート以来、１年９ヵ月、多彩な活動と発信で、應典院と倶楽部への注目はますます高まっています。
なぜお寺が開かれるのか、なぜ市民活動にかかわるのか――。應典院の目指す「共＝コモンズ」の場づくりへ向けて、意欲ある参加と清新な提言が求められています。

伝統的な寺院文化と伸展するＮＰＯの潮流。さまざまなジャンルで新しい「公共文化」にかかわる４人のゲストに語り合っていただきました。

出席者（敬称略）

真嶋　克成　（大阪NPOセンター事務局長）
花立都世司　（大阪市立中央青年センター）
蔦田　　夏　（関西こども文化協会専務理事）
桂　　睦子　（茨木市議・茨木元気フォーラム）

出会いの場・應典院

――まず、みなさんの今の立場から應典院や寺町倶楽部の活動に対しての感想をお願いします。

桂：私は去年の１月、友人に誘われて初めて應典院に来ました。スタートして１年と９ヵ月だそうですが、これまでの多彩な事業と、多くのかかわりの中で、應典院も寺町倶楽部も少しずつ活動の照準が定まってきているのではないかと思っています。

蔦田：私たちの関西こども文化協会（＊1）は應典院との共催活動をはじめ、いろんなことに活用させていただいていますが、一番いいのはここの仕組みが使いやすいということ。こちらの団体の理念や活動の目的も理解していただいているということも重要なところだと思います。



▲應典院で開かれた97年度のＮＰＯアワード。これからの市民活動を作り上げていく、新しいエネルギーが集う。

花立：最近いろいろと個性的なＮＰＯ（＊2）が登場し始めましたが、その中でも「気づき　学び　遊び」という現代的なキーワードでユニークな活動をされていますね。

去年の３月には大阪市社会教育主事会30周年の記念シンポジウムを應典院で開催させてもらったこともあります。今、日本社会では、公共性の考え方について新たな転換期を迎えていますが、これまでの公共＝官という概念が変化して、それとは違った、一人ひとりの個人からなる公共性を作ることのできる場として、應典院を評価しています。

真嶋：私は97年４月の應典院の落慶式典にご招待いただいたのが最初です。ここの場が持っているもの、そしてそれをしっかりとした理念が支えていて、人間の未来に向かう力が生まれてくると感じました。大阪ＮＰＯセンター（＊3）も、97年に「ＮＰＯアワード発表会」（＊4）をここで行ったんですが、それは應典院がまさにこれからのＮＰＯ活動の拠点になると思ったからです。

つながりの創造

――公共性というお話がでましたが、こういった「場」をお寺が持っている意味、その「場」の魅力というのはどういうことだと思われますか。

花立：日本のＮＰＯは十分な場を持っていない場合が多いですが、これからは場の役割がますます大きくなると思います。空間で人と対面して場を共有化する。そうすることによって生まれる新しい情報、解釈が重要です。つまり、その場の雰囲気のようなものも大事だということです。

蔦田：私は長い間地域の集まりにかかわってきましたが、人と人をつなぐ心がなくなってきているように思います。地域にこだわらなくても、生き方や価値観や趣味を通して、時代に即したつながり方を求めて行くべきですね。そういう従来の地域を超えて、つながりあえる場として應典院はあるのではないでしょうか。

桂：そうですね。私はここで自分とは全く違うタイプの女性と出会った経験がありますが、彼女と向き合ってはじめて自分というものが見えてきた実感がありますね。場についてなんですが、行政の作る公共と、自立した個が作りだす公共と、ふたつの場に分けられるべきではないでしょうか。應典院は新しい市民を作り出す可能性を秘めた場所であり、地域を越えて新しい価値観を生み出す人が集う、大きな役割をになった場所だと思います。ひとつのイデオロギーや利権のために集まることはあっても、価値観すべてを転換していこうという場はまだまだ少ないと思います。


▲高校生たちの模擬国連。21世紀を担う若い力が社会を変える。

蔦田：應典院は主宰者が理念を持って建物を建て、その理念にそって活動を作りだし、人を集めようとしていますよね。この場所が使いやすいのは、理念がきちんと底流にあるから。特定の思想信条にとらわれず、市民が主役になれる、應典院のような場がもっと必要だと思います。

真嶋：私の故郷はあちこちにお寺が多くありました。しかし、伝統的に、人・情報・空間はあっても、それらが三位一体になってかもし出すものがなくて十分に活かされていなかった。公民館も、お上の建物ですから、地方行政の管理のもとにあって、本当の意味でコミュニティの場であることが活かされてなかった。蔦田さんのいうように、市民にとっての場というものを捉えなおしていかないといけないですね。それを考えると、應典院の場は上手に3つのものを結びつけていると思いますよ。

蔦田：まず地域ありきではなく、人ありき。人と人が出会える、向き合える場が地域なんだと最近つくづく思います。逆に言うと、人と人とが向き合う場をどんどん作っていかないと、それこそ地域は再生しない。例えばひとつの企画が生まれて、伝えたいことや自己実現ができて、また別の人が自分の住むところでもやってみようかなと思えるような拠点に應典院がなればいいと思うんです。いいかえれば、人間の生き方の提案ができるような場が、私は本当の公共だと思います。そこから改めて地域の重要性というものが見えてくる。

花立：そうですね。地域というものは、コミュニティといった方が広がりを持つ場合があると思います。ある特定のテーマに関心を持つ人たちの形成するテーマコミュニティをはじめ、インターネットコミュニティ、ゲイコミュニティ、ろう者のコミュニティなど、地域を超えた様々なコミュニティがあります。これらのコミュニティも地域と劣らず、重要です。ただ、地域コミュニティのいいところは、あらゆるものを多様に含んでいるということ。多様な人々と共生しないといけない、向き合わないといけない場ですよね。



桂　睦子
97年、無所属で茨木市議に初当選、全国でも最若手の市議のひとり。市政のかたわら、学生時代からフィリピンのＮＧＯ活動にもかかわるほか、若者に政治を体験してもらう「議員インターン制」を推進している。
①大阪府②12月14日③ＡＢ型④ひたすら仕事の3日間⑤自立・共生・出産・家族

真嶋：ＮＰＯの世界でも“地縁から知縁へ”ということがいわれていますが、テーマや課題を共有しながら、人と向き合う、語り合う、踏み込んで行くことが大切だと感じます。

花立：昔は共というものがありましたよね。例えば原っぱみたいな、なにげない場所ですが、共同体によって生かされている自由な空間。一方で、そういう空間が公園のように官のもと、管理化してしまい、もう一方で私有のものとして売られていく。すべての場が公と私の二分法で分けられてしまい、その間がなくなってしまう。市民文化を作るということは、双方の間に第３の領域として境界線を引くだけではなく、横断的にかかわらせていくことだと思いますね。

＊1関西こども文化協会：大人と子どもが遊び・文化・芸術を共に語り合える場の創造を目指し、96年に設立。「子どもの権利条約」に関する学習会の開催や教育講演会、キャンプなど、さまざまな事業を展開している。

＊2ＮＰＯ：Non Profit Organizationの略で、非営利の民間活動団体のことをいう。

＊3大阪ＮＰＯセンター：96年に日本で初のＮＰＯ支援センターとして設立される。各種セミナーや交流会の開催など、さまざまな事業を通して、市民活動の支援を行っている。

＊4ＮＰＯアワード：年1回開催される大阪ＮＰＯセンター主催の市民活動報告発表会。多様な市民活動を支援する目的で企画されており、優秀団体の表彰を行っている。

＊プロフィール　①出身②誕生日③血液型④今年のお正月は？⑤21世紀へ向けてのキーワードは？



真嶋　克成
大阪ＹＭＣＡ国際・社会奉仕センター館長、関西ＮＧＯ協議会事務局長を経て、96年、大阪ＮＰＯセンター創立と同時に、事務局長に就任。ＮＰＯお助け隊やＮＰＯアワードなど、ネットワーク事業を進め、ＮＰＯを支援するリーダーとして信望は厚い。
①京都府②11月29日③ＡＢ型④88歳の母との同居生活がスタート。娘夫婦と孫が来ました。⑤共に生きる（共生）・しなやかな心



蔦田　夏
96年創設の関西こども文化協会専務理事。「子どもの権利条約」を市民社会へ広げる活動にかかわる。應典院を会場に、人形劇の公演やワークショップ、教育講演会などを開催。今秋に教育シンポジウムの共催を予定している。
①長崎県②7月9日③O型④長崎で酒浸りのお正月⑤パートナー

自立した市民を育てる

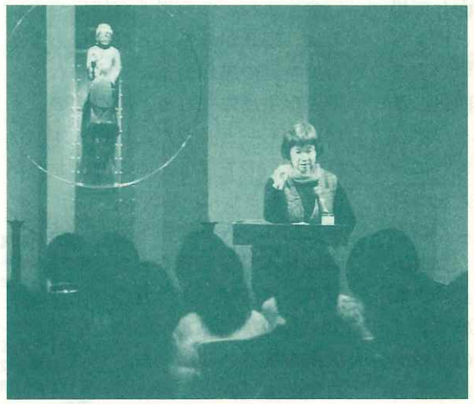
――ひとりひとりの個人の生き方が、社会を変えると言われますが、個人と地域、場という問題についてどのようにお考えでしょうか。

桂：私は、生まれも育ちも根っからの茨木っ子なんですが、学生の時にフィリピンでＮＰＯ活動にかかわって、逆に日本という国がよく見えてきた経験があります。以前は地域というものをほとんど意識したことはなかったんですが、今は私が海外で得た考え方や感じ方というものを、改めて私の原点であるこの地域で共有のものにしていきたいという思いがあります。でも、そこに至る前に自分がどういう人間で、どういう生き方をして、どういう価値観を持つのかということがないと本当の地域を語れないのではないでしょうか。共有する前に、もう一歩自分自身を理解しないといけないと思いますね。

蔦田：相手と向き合うことで、違いを認め合えるし、自分自身を見つめることができる。最近、「違いを認める」とよくいわれますが、言葉だけが先行していて、実際に認め合うまでに至っていない。また私たち大人も、自分の内面とじっくり向き合う機会がほとんどない。これは、いったん自分の価値観をひっくり返してしまうくらい、自分自身を問い直さないと、結局本当の自分と向き合ったことにならない。だから、他者ととことん向き合って違いを認め合い、自分を見つめ直すことが大事だと思います。



▲春の講座。ガーデニングに親しむ女性たちの集い。



▲月例の寺子屋トーク。過去から学び、今を見つめ、明日を想い、共に考える講演会。

花立：私は、差別のために文字の読み書きができない成人の識字活動（＊5）に関心があるんですが、ある研究によると、現実の社会でネットワークを持つ人は識字教室に来ない傾向のあることが指摘されています。ネットワークを持たず、読み書きができない人が、行政だったら助けてくれるのでは、という期待を抱えて来られる。いろんな人を受け入れていくことは行政のよいところなのかもしれませんが、実際にはそういう人は、本当にしんどくなってしまってから来るので、気軽に行ける場でもない。行き方が、困ってから行くというような一方向しかないわけですが、もっといろんな道から行けるようにしないといけない。

蔦田：そういう場を、どうＮＰＯが作っていくのかということですよね。これからの市民社会では、自分の人生の主人公は自分だという主体性を持った生き方が一番大切になってくると思うんです。建物があってもそれを活用する市民の側の理解がなければ、理念にそった使い方にはならないし、どう活用するのかというものがないと場は死んでしまう。行政の人も一緒に場を作っていくという意識があればいいのですが…。

真嶋：イギリスにはチャリティー団体と規定されるものには4つあって、1つが貧しい人への救済、2つめが教育の振興、3つめが宗教の振興、4つめがコミュニティへのサービスなんです。それが公共活動の願いともいえる。大阪市も宗教法人だからダメというのでなく、應典院のように実際に行っている文化的な活動に対するサポートが考えられないのでしょうか。

桂：同感ですね。でも、まだまだ行政の価値観の転換は遅れていると思います。ハコモノだけ作って、人を育てるということができていないというのが現状。ＮＰＯ法ができたのは、がんばり続けているＮＰＯ・ＮＧＯがあって、国会議員を巻き込みながら取り組んだからだと思うんです。だから、應典院のような場所から巣立った人が、これからの政府や行政を変えていく可能性がありますね。社会のシステムも含めて今は価値観を転換する途上にあるということが、広くみんなの共通認識になればいいなと思います。

真嶋：そうですね。これからは、私たちが行政とどうかかわっていくかということが大事になってくる。秋田県の鷹巣町では、90億円の財源のうち、30億円が民生費に使われ、町ぐるみで「福祉まちづくり」を積極的に進めています。それには、町長のリーダーシップはもちろん、議員や職員、町民が一緒になって「福祉まちづくり懇談会」を設置したり、ワーキンググループを組織して、具体的な成果をあげている。これからは、行政に任せておくだけでなく、私たちの側から、応援体制や協働関係がとれるのかという発想も持たなくてはならないですね。

＊5成人の識字活動：60年代以降、部落差別が原因で読み書きのできない人たちによる識字運動が始まり、現在では、在日外国人なども対象に日本語教室が開かれ、識字活動が行われている。



花立　都世司
大阪市教育委員会社会教育主事として、現在、大阪市立中央青年センターに所属。関心領域は広く、「国際化時代のことばと人権」「＜私＞を語る、ということ　～セクシュアリティをとおして～」など、斬新な講座企画を打ち出す。成人の学習論やボランティア活動にかかわる研究活動も行っている。
①大阪府②11月19日③Ｂ型④書類の整理など⑤成人教育・セクシュアリティ・リテラシー（識字）・私を語るということ・ワークショップ・ネットワーキング



▲'98年のコモンズフェスタ。立場を越えて、様々な人が「共」の場を分かち合う。

２１世紀の市民活動へ向けて

――「共の文化」というものを創造して行くうえで、これからも市民活動のサポートをしていきたいと考えていますが、今後應典院や寺町倶楽部が市民社会に対し、どんなことが可能でしょうか。

蔦田：私は21世紀をになう子どもたちをサポートしていただけたらと思います。子どもが生き生きとできる場で、素になれる、あそこに行けば自分を取り戻せるという場所であってほしい。そういうものが應典院でできればいいなと思います。

桂：行政も市民活動をサポートしたりＮＰＯ法もできてますが、規模が大きいとか、実績があるとか、そういうところで判断されてしまい、本当に地域で活動している人が発展して行く過程をうばわれている場合が多い。應典院では、市民活動を実績や大きさで測るのではなく、作り上げて行く過程を共にするという視点を入れていただきたいと思います。

花立：サポートといったときに、たとえ市民団体対象のサービスであっても、市民がつねにサービスの受け手になってはいけないと思うんです。市民自身がサービスする側だということ、社会のルールや制度にのってサービスの主体になっているのだということでできるのであればいいと思います。そうすれば市民活動のサポートも根づいていくと思います。

それと、ここのいいところはハイブリッドで融合的なところだと思います。市民活動の中でも、いろんな潮流が生まれてきていて、多様化が進む一方、相互にかかわりあえたり、統合される機会が乏しい。そういったものが総合できればと思いますし、應典院はそのサポートができる、総合市民活動の場であると思います。

真嶋：まず應典院が文化発信の機能を果たしているということが、十分に現状の市民活動をサポートしていることになる。また、これから育とうとしている団体を発掘したり、文化支援的な機能も育ててほしいと思います。行政側からも市民団体の活動の中身に対する支援を正しい評価で行ってもらえれば、税金を使うという意味から市民の共感を得ることができると思います。それには、私たちがそういうことをきちんと発言していけるような市民として育っていきたいと思いますね。

EVENT REPORT　寺子屋トーク報告



第14回の寺子屋トークは、ホリスティック教育研究会代表の手塚郁恵さんを講師に、「自信を育てる子育てワーク」と題して、12月７日に開催しました。

人と人とのつながりが希薄になりつつある現代で、心のつながりの大切さを教育のなかで、子どもにどのように伝えていくべきかと活動を続けてこられた手塚さん。当日も、現代の子どもたちをとりまく様々な問題や事件に対する原因を、人と人との関係性、家族、母と子という観点からお話しいただきました。

情報化社会の中、子育てもマニュアル化し、育児書、雑誌などの情報、例えば平均身長や体重とわが子を見比べ、平均以下だと、発達が遅れているんではないかなどと、何かよくないような錯覚にとらわれてしまうといいます。

確かに、データや他人との比較の中でしかわが子、ひいては自分の評価を確かめるという傾向が、現代の人の中にありがちではないでしょうか。そんな中では、自己評価が低い子どもが育ちやすいと、手塚さんは指摘されました。

最近、様々な子どもの事件がありますが、事件を起こす子どものほとんどが、自己評価が非常に低いことが共通するということです。

そんな中で、「子どもに問題が起こった時、その問題を解決しようと考える前に、子どもと向き合うことが大切です。しかし、それにはまず自分自身と向き合うことが重要です」とのお話には、参加者のみなさんも考えさせられたのではないでしょうか。

参加者30名。

市民活動サポート事業開始に向けて

次年度の寺町倶楽部の主たる事業のひとつとなる、市民活動サポート事業。次年度スタートに向け、いよいよその準備が本格化しつつあります。

寺町倶楽部らしい市民活動サポート事業と何なのか。今の現状をレポートします。

相互交流こそが大切

今年度総会で起案の通り、次年度のメイン事業が市民活動サポート事業です。これは、倶楽部の趣旨に賛同いただけるならば、その組織や規模の大小にとらわれず、自主的に活動を行うグループ、団体をサポートしようというものです。

具体的なサポートとしては、應典院という「場」をいかに社会に開かれたものにしていくのかを根底に、協力金や会場提供、事務諸機能の提供、事務局運営などを考えています。



ただし提供するだけでなく、倶楽部とサポートグループ、団体が、活動を共にすることによって、その発想や考え方などを相互に交流させ、互いの視野を広め、その意味を追求することが大切だと考えます。それによって、互いの活動がより深い社会的意味を持つようになるのではないでしょうか。

会員のみなさんも参加を

今後は、5月の次年度スタート同時に、サポートの開始に向け、具体的な作業を進めていきます。

その中でぜひみなさんにもお願いしたいのは、サポート事業に参加をしてほしいということです。事務局のみで事業を進めていくのは容易なことですが、いろいろな市民活動を知る、体験するよい機会です。会員のみなさんの参加があってこそ、事業の深みや広がりがあるのです。

また関わることによって、それぞれの人の中での気づきや学びにつながっていくものだと思います。

サポートするグループ、団体は、現在今まで関係のあった団体を中心に、ピックアップし、検討中です。今からでも、会員のみなさんが参加している、あるいは知っている市民グループ、団体をご推薦ください。

最終的にサポートグループ、団体の決定は、理事会を経て事務局で決定しますが、今回、サポート事業の対象にならない団体とも、いろいろな形で関わり、関係性を深めることが、次の事業へつながっていきます。

次号のサリュで、このサポート事業の概要についてはお知らせしますが、ぜひ多くの会員のみなさんのご参加とご協力をお願いしたいと思います。

VOICE

今回のVOICEは、伊藤伸二さん。伊藤さんは、日本吃音臨床研究会会長で、自らもどもりに悩みながら、「どもりを受け入れ、どうつき合っていくのか」を多くの同じ悩みを持つ仲間と活動を続けていらっしゃいます。

應典院との出会いは、コモンズフェスタで『「セルフヘルプグループ」って何？』という催しに、出演したことがきっかけです。

その催しでは、口唇口蓋裂児とともに歩む会の中田智恵海さんの司会で、インターセックス（半陰陽）の人たちのグループを初めて作った橋本秀雄さんと対談しました。その話し合いの中で、直接出会って聞いてみなければ全く知らなかった世界にふれ、人は一人ひとりが本当に違うのだということを認識しました。それと同時に一方で、それらは普遍的なことだとお互いが共感しあえた部分も少なくありませんでした。

私自身、どもりに悩み、強い劣等感を持った時期がありましたが、どもりをはっきりと認め、他人と違うということに向き合うことで、自分を取り戻したように思います。他人と違う自分と向き合うことは、ある意味で勇気がいり、エネルギーを必要としますが、それをなくして何も生まれないのではないでしょうか。

他人との違いを認識すること、そしてそれに直面すること、その中から他者と人間として生きることの普遍的なものを探っていくには、人との意味ある出会いが必要です。

應典院では、これから様々な催しが展開されていくと思いますが、人と人とのいい出会いを大切にしていってほしいですね。多くの人との出会いが気づきにつながっいくと思いますし、それが自分と向き合うきっかけにもなると思うからです。

日本吃音臨床研究会では、2月には竹内敏晴さんの寺子屋トークを協力し、3月からは竹内さんの「からだとことばのレッスン」を應典院で始めます。ぜひ、寺町倶楽部の会員の皆様にもご参加いただき、多くの出会いを喜び合えたらと思います。

秋田住職発 應典院掲示板

寒中お見舞い申し上げます。

昨年の暮れ、結石の手術を受けるため、生まれた初めて入院生活を経験しました。十日間の入院でしたが、大部屋の病床で感じたこと、ふれたことは、外の世界とは異なるものがありました。

同病相憐れむ、というより相励ましあいながら、患者同士の間に生まれる連帯感。看護婦さんのあたたかな笑顔と呼びかけによって、癒される実感。見舞いの家族と、交わす外と内のつながり。一言で言ってしまうと、「弱さ」において一体となる「強さ」の発見といえばよいでしょうか。

弱さ故、自分を思いやることによって、これまで知らなかった、自分の強さに気づかされることがあります。けっして病気を美化するつもりはありませんが、「弱さ」から始まる自分もまた、たいせつにしたいな、と感じました。

竹内敏晴さんの教室開講

2月の寺子屋トークの講師・竹内敏晴さんの、「からだとことばのレッスン」が、3月から毎月第2土・日に、應典院で開講されます（應典院協賛事業）。難聴でしゃべれなかった経験を持つ、演出家の竹内さんは、からだとことばの関係に着目、東京や名古屋で定期的にワークショップを開いてこられました（以前寺子屋トークにいらした鳥山敏子さんも、竹内さんの教え子の一人）。からだは、自分と世界とがふれる境界線。そこに必死になって生きようとしながら閉ざされ、病み、ゆがむ「からだ」…。本当の声とことばを回復しながら、人間の生き方の根底を照らしだす、体験的講座です。

演劇関係者のみならず、教員や親にこそ参加していただきたい講座です。ぜひ一度のぞいてみてください。（講座の問い合わせは、℡0720-20-8179日本吃音臨床研究会）

應典院でインターン研修

去る1月6日～27日まで、初の應典院インターンとして、倶楽部会員の松井千穂さんが、事務局運営に参加しました。これは、ボランティアスタッフとして應典院にかかわりながら、その活動を通じて研修するもの。短い期間でしたが、企業やNGOで就業体験を持つ松井さんの力が存分に発揮された研修となりました（今号の座談会は、松井さんが担当しました。ご苦労さまでした）。

あちこちで春の公開講座に出講

春の研修シーズン、あちこちからお声をかけていただき、以下の日程で應典院の活動についてお話しさせていただきます。よろしかったら、のぞいてみてください。2月22日（月）中之島・ソニー生命／2月23日（火）四天王寺・大阪市立婦人会館／3月23日（火）四天王寺・大阪市立婦人会館＊シンポジウム／4月7日（水）京都烏丸・佛教大学四条センター

＊詳細は要問い合わせ。

【新入会員ご紹介】（1998年1月31日まで）

11月25日以降にご入会いただいた方々です。ありがとうございました。

○一般会員

【大阪府】

徐　明子　大阪市中央区
伊藤　克成　大阪市西区
清水せつこ　堺市
桂　千恵子　茨木市

【兵庫県】

本荘　眞澄　尼崎市

会員総数現在241名

トークサロンのお知らせ

ご無沙汰のトークサロンは、2月3月以下の予定で開催されます。参加費無料。冷やかし歓迎！

2月10日（水）19時／2月13日（土）14時／3月17日（水）19時

年末に自分と向きあう——自分感謝祭開催

12月26日、去りゆく歳と自分自身を供養する、應典院のオリジナル法要、自分感謝祭が開催されました。

当日ご参加いただいた会員の須田泰行さんに、ご感想を語っていただきました。

◆　◆

「1年間生きてきた自分に感謝するのもいいものですよ」、トークサロンで秋田住職からいわれた一言、それが私を自分感謝祭に参加させるきっかけとなりました。

確かに今まで、年末に1年間の自分に感謝するなんてことはなかったし、参加費が無料という気安さもあって、なにをするのかなどとあまり深く考えずに、当日應典院へ向かいました。

着席してすぐに、献灯、献花、献香の役を指名され、つらいなあと思いながらも、内気な？私は黙って遂行しました。しかし、その厳かな儀式に参加するという主体的な気分になれたのも確かでした。



自分感謝カード、懺悔カードを記入してみると、自分と向き合うなんてことは、忙しく、なんとなく時間が過ぎていく毎日の中で、忘れていたような気がします。いい自分もいた、悪い自分もいた、しかし確かに自分は生きているということを少しは感じられた気がします。

気分もすっきりとした交流会では、初対面の人ともなぜか活発に会話をしてしまいました。いつもと違う自分に戸惑うほどでした。

年も明け、今年も年末に感謝できる自分自身でありたいと思います。今年の自分感謝祭も参加希望です。よろしく。